

人間教育専攻

臨床心理士養成コース

藤谷 みどり

指導教員 吉井 健治

I. 問題と目的

いじめ被害は、長期間を経た後でも、心理的・身体的に影響を及ぼすことが指摘されている(坂西,1995)。近年では、いじめを体験した者に、心的外傷後ストレス障害(PTSD)や不安障害などの診断が下る者もあり、不登校や引きこもりのように社会に対して距離を置かざるをえない状況に陥っているケースも多く見られる。そのため、一見、いじめによる傷が回復しているように見える者の中にもその後の学校適応や対人関係に長期的な影響が及ぼされていることが考えられる。山口・長野(2012)は、いじめに関わった者を対象に、その後の友人関係を調査している。その結果、被害者は他の役割よりも友人関係において希薄化がみられることが明らかになった。しかし、いじめ被害者と非被害者では友人関係にどのような違いがあるのかは具体的に明らかにされていない。また、被害者はそうした自身の友人関係に対してどれほど満足しているのかというような被害者の内面に着目した研究は見当たらない。

そこで、本研究では、被害者の適応状態を友人関係の視点から捉え、いじめ被害による影響がその後の友人関係にどう関連しているのか、また、非被害者との間で現在の友人関係と友人関係満足度にどのような違いがあるのかを比較し、検討することを目的とした。

II. 方法

2015年7月と10月に、A大学とB大学の大学生、大学院生を対象に、質問紙調査を実施した。337名の回答が得られ、301名を分析対象とした。いじめ被害体験がある者に対しては、当時の苦痛度と「いじめの影響尺度」40項目(香取,1999)に回答を求め、被害者と非被害者の両者に対して、「友人関係尺度」35項目(岡田,2007)と「友人関係満足度尺度」8項目(高坂,2010)に回答を求めた。本研究で用いたいじめの影響尺度の因子は、マイナスの影響因子が「情緒的不適応」「同調傾向」「他者評価への過敏」、プラスの影響因子が「精神的強さ」「他者尊重」であった。友人関係尺度の因子は「自己閉鎖」「傷つけられることの回避」「傷つけることの回避」「快活的関係」、友人関係満足度尺度は8項目であった。

III. 結果

各尺度は、先行研究で尺度内の各因子において信頼性と妥当性の検討がされており、それに従って分析を行った。全ての尺度で男女差が見られなかったため、その後の分析は被害者群(苦痛小・中・大群)と非被害者群の分類で行った。まず、いじめの影響について苦痛小・中・大群で分散分析を行った結果、苦痛度が高くなるほどいじめのマイナスの影響も有意に高くなっていた。しかし、プラスの影響は苦痛度による有意差は見られなかった。

次に、友人関係と友人関係満足度について、被害者群と非被害者群で分散分析を行った結果、友人関係尺度の「自己閉鎖」は、苦痛大群が苦痛小群と非被害者群よりも有意に高かった($p<.001, p<.01$)。「傷つけられることの回避」は、苦痛中群が苦痛小群よりも有意に高く($p<.01$)、非被害者群が苦痛小群よりも有意に高かった($p<.001$)。「快活的関係」は、非被害者群が苦痛小・中・大群よりも有意に高かった($p<.05, p<.05, p<.001$)。このことから、苦痛小群と非被害者群は、ほとんど同程度に快活的関係を取る傾向にあり、苦痛中群では、傷つけられることを回避する傾向が強く、苦痛大群では自己閉鎖をする傾向が強くなることが考えられる。

友人関係満足度は、苦痛小群が苦痛中群よりも有意に高く($p<.05$)、非被害者群が苦痛中群よりも有意に高かった($p<.05$)。このことから、過去の苦痛度が高いほどその後の友人関係満足度が低められることが示唆された。

次に、苦痛度別に相関分析を行った結果、苦痛小群では、いじめの影響(マイナスの影響因子)と友人関係に正の相関、いじめの影響(プラスの影響因子)と友人関係満足度に正の相関がみられた。苦痛大群では、プラスの影響因子と友人関係に正の相関、マイナスの影響因子と友人関係満足度に負の相関がみられた。そして苦痛中群においては、苦痛小群と大群で見られた有意な相関が全て示されたことから、いじめの渦中に強い苦痛を感じながら登校し続けることの潜在的なリスクが示唆された。また、苦痛中群を対象にパス解析を行った結果、「他者評価への過敏」から「傷つけられることの回避」を媒介して友人関係満足度に負の影響を与えていることが明らか

となった。

IV. 考察

本研究の結果から、301名中108名(全体の約36%)が被害経験を受けており、いじめが身近で起きていることが確認された。また、先行研究(香取,1999;坂西,1995など)と同様に、いじめによるマイナスとプラスの長期的影響が見られた。

友人関係について、希薄化の観点から見ると、本研究の対象者も全体的に友人関係の希薄化傾向が示されたが、被害者群と非被害者群の間に大きな得点差がみられないことから、現代青年の中でいじめ被害者の友人関係が特別に希薄化しているわけではないということが明らかとなった。しかし、各群において友人関係尺度得点の高い因子が異なっているため、各群それぞれに友人とのつきあい方に特徴があることが示唆された。

友人関係満足度については、苦痛小群が非被害者群よりも有意に高くなっていたことから、いじめによるプラスの影響が友人関係をやや円滑にさせ、友人関係満足度を高めることが推察された。また、苦痛中群におけるパス解析の結果から、いじめの影響と友人関係、友人関係満足度の3つに関連が見られ、山口・長野(2012)が指摘するように、いじめ被害経験が現代青年の友人関係を希薄化させている要因のひとつであることが示唆された。

V. 今後の課題

本研究では、苦痛度ごとに分析を進めた結果、各群によって及ぼされている影響の度合いが異なり、友人関係にも各傾向が見られた。今後は、この結果を基に被害者ひとりひとりに応じた支援方法の検討が必要になると考えられる。